西欧における東洋の宗教運動について

スイスの事例

ジャン・フランソワ・メイヤー

「チベットの山の香りを漂わせながら、人類に新しい宗教の伝言を運んでいる。それは純粋な心の宗教である」『モルヤの庭の木の葉』（I，43）より

ここ数十年間に新しい宗教運動が多様化し、西洋社会に文化的多元化の状況を増大させている。脱キリスト教的宗教性の勃興という将来的展望の中で、一団の主題と概念の流布に、こうしたグループが共通にあずかっている部分は無視できない。[1] これに反して、北米や欧州の総人口に占める新興宗教運動の会員数や潜在会員数は、時に多く見積もられている。[2]

いずれにせよ、判断できる限りでは、どの宗教運動も将来的に新しい世界的な大宗教となるものの萌芽としての姿さえ現わしてはいない。むしろ分裂が深まっているといった印象である。

東洋の団体だけに限るなら、教会という「市場」に関しては常に供給のほうがより大であることが認められる。二十年ほど前に流布した諸々の教会が、若干の場合にはおそらくその平均寿命に限りがあるとはいえ、その位置を保持している。そしてリストには絶えず新しい宗教上の導師の名前が付け加えられている。

このことは、必ずしも彼らの説くところに耳をかたむける人が増加しているという意味ではなく、精神性を求める者にとって、数十年前に比して、その選択の幅が著しく広がったということである。

スイスの現状に関する若干の考察

スイスも決してこの現実をまぬがれない。「表1」に列挙した二十件の宗教団体について概観してみれば、このことに気がつく。ここでは一部の団体だけ――十分に代表的なものであるが――を取りあげており、バグワン・シュリー・ラジュニーシュ派、サトゥヤ・サイ・ババの信奉者などスイス国内でこれらと同様に活発に活動しているその他二十件ほどの東洋の新興宗教団体や、禅の修行、チベット仏教、アミディスト仏教などの仏教系の団体は含まれていない。

（1）一方で、どの運動もスイス全土の人口に比べてそれほど多くの会員数を結集していないことが認められる（スイスの総人口は約六百五十万人に達している）。これら新興宗教団体の実会員数は、多様なキリスト教的セクト（事実、よりずっと以前から定着している）の信者数に比べるとわずかなものである。[3] ただ一つ「超越的瞑想」（MT）の突出した数字だけが例外であるが、これは非常に相対的な数字である。というのもこの数字はMTの研修を受けた者すべての累計で示してあり、活動本部に定期的に通っている、より制限された意味での会員数ではないからである。

そのうえ、MTの幹部自身、瞑想者の大多数が一つの運動の「会員」であると自覚してはいないと強調している。MTに数えられた「瞑想者」の中には、現在でもこのリストに挙げられている他の宗教団体の会員に数えられている者もあるようである。またMTの活動を全面的に止めてしまった者の数は推定できない。

（2）他方で、一九七〇年から一九八〇年の間に生じ

た相当数の設立が注目される。これらは求道者たちに委ねられる教会選択の急速な拡大をもたらしている。

こうした多様化がこの先十年の間、同じテンポで進行していくのかどうかを知るに十分なだけの時間的経過をわれわれはまだ持っていない。いずれにせよ、例えばシュリ・マタジ・ニルマラ・デヴィや、マタ・アムリタナンダマジなどのように、数年前までは無名であった指導者のもとに集まった新興宗教団体が、われわれの眼前に出現していることは確かである。

例えこれらの団体の新たな設立の絶対数が万一減少したとしても、必ずしも、東洋の宗教に対する関心の低下を示すものと性急な結論をくだすことはできない（新興宗教団体の数は際限なく増加するわけでもないし、一つの団体に加入すること以外にもこうした関心は根強く存在し得るのである）。

東洋に起源を持つ宗教運動の歴史やその影響力についての国ごとの全体的な研究は僅かしか行われていない。研究者にとっては、スイス連邦を構成する諸州が非常に多様であるという障害があるにもかかわらず、そのささやかな国土面積は、鳥瞰的なアプローチに適しており、他方で、その文化的、言語的多様性が、調査結果に、より大きな興味をそえてくれる。

さらに、本書の読者の中には、米国の社会学者ロドニー・スタークとウィリアム・シムズ・ベーンブリッジのごく最近の膨大な著書の見解に興味を持つ方もあるかと思われる。両氏の見解では、スイスの人口に対する東洋の新興宗教運動の団体や本部の数の比率が、他の欧州諸国よりも上回っていると見積っている。また、スイスにおけるこうした驚くべき結果は、ジュネーブという都市の特性に負うところがあると述べ、「ジュネーブ以外にこれほどまで異教を受け容れている都市はない」[4]と結論づけている。ジュネーブのモルモン教徒の比率が同じく他のスイスの都市よりも相当に高いということが彼らの観察結果を立証しているように思われる。彼らはこの現象を、ジュネーブにおける世俗化の進行によって説明しようとしている。

スタークとベーンブリッジの検証には当然いくつかの批判的な意見もあろう。使用した基礎資料の土台が弱く、議論の余地のあるものであることは明らかである（アメリカで作成されたリストから住所録を作成したり……）。しかしわれわれが最近二年間にわたってスイス全土で行なった調査結果を見ても、ジュネーブにおける（人口に対する）東洋の宗教団体数の比率が、スイスの他の地域よりも高いというのは確かであるように思われる。しかしながらスタークとベーンブリッジの解釈は非常に重要な要因を見逃している。というのは、ジュネーブという都市が、中位の規模でありながら国際的な中心地であるという点である。この点は、モルモン教徒についてや東洋の宗教運動について明らかにされた統計的な不均衡の、少なくとも一部を説明するものである。

ジュネーブには数多くの国際的な諸機関が存在しているために、様々な国籍の様々な宗教的志向性を持った人々が在住している。これは既に数十年前からのことであり、両大戦間に、ジュネーブが国際連盟を擁していたためであろう。それ故、ジュネーブに比較的多くの新興宗教運動の「接触点」があるのは、地域的な原因によるものではなく、同規模の他の欧州の都市には恐らく見られない「人工的な」状況によるものであろうと思われる。

このことは、ジュネーブの特殊な事例〔を示す〕という以上に、こうした現象を正確に理解するための数字的なデータが不十分であるということ、また諸々の統計が包含している現実についての検証が不可欠であるということを示している。

例えば、シュリ・ラム・チャンドラ伝道会の代表者であるサハジ・マルグは、同会のスイスにおける活動メンバーの約三分の二がスイス在住の外国人であると指摘している。また日蓮正宗では一九六七年からジュネーブで定期的に会合を開いているが、スイス人の信徒が初めて生まれたのは一九七五年のことである。

表に加えるべきこれらの微妙な差違にもかかわらず、スイスにおける東洋宗教の存在が今日では国内の宗教事情の構成要素になっていること、また、こうした現象の発生過程のいくつかの側面に光をあてることができるこ

ともまた依然真実である。次ではこの点に注目してみよう。

スイスにおける東洋宗教——歴史的な展望

プロテスタント系組織の提案によって一九五六年十月チューリッヒで行われたセクトについての一連の講演の際に、フリッツ・ブランケは、アジア宗教が新たな意識に目覚め、それまでその宗教が普及していた地域の地理的な境界を取り払おうとしていることに注意を喚起した。すなわち、アジア宗教はいまや、それまでキリスト教徒の世界であった地域においても攻勢に転じている。[5] こうした発展についての自覚がこの時期に生じているというのは、東洋に起源を持つ宗教運動が根づこうとしていた地域は何年も前から時間をかけて準備されていたと判断するのが妥当だということである。

米国の場合には、ロバート・S・エルウッドやJ・ゴードン・メルトンなどの研究者が宗教の二者択一性の伝統が存在している点を明らかにしている。しかしスイスはカリフォルニアの状況と同じというわけにはいかない。では、東洋に起源を持つ宗教運動がスイスにおいて広まっていったその経路とはどのようなものであったのだろうか。

「神智学協会」はしばしば、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて西洋に東洋的な概念を普及させた特別仕立ての乗り物のように見なされたが、まずその役割から見てみよう。十九世紀末には既にスイス国内に「神智学協会」のメンバーがいた。特に、政治家（国会議員）のアルフレッド・ピオダ（一八四八年―一九〇九年）、また、後に「ドイツ神智学協会」を創設したフランツ・アルトマン（一八三八年―一九一二年）などが挙げられる。一八八九年、ピオダはスイス南部のロカルノの町近くの丘陵に神智学協会の集会場を設立しようとしたが、実現されなかった。

しかしモンテ・ヴェリタと命名しなおされたその丘陵には、一九〇〇年に、ユートピア的な菜食主義者の団体が創設された。その後何年もの間モンテ・ヴェリタは、社会改革家、神秘学者、芸術家、思想家などの小世界の磁極のような存在となっていた。[6]

しかし、モンテ・ヴェリタ周辺には多くのドイツ人やロシア人、オランダ人は見られるが、スイス国民の名前を見つけるのは極めて稀であった。むしろそこでは、この国の魅力に魅せられて集まったコスモポリティックな外国人の居留地にいるような感があった。同様に、同じ州内のイタリア語圏の都市ルガノにある神智学協会の秘密集会所は、ドイツ人によって設立され、活動にはドイツ語しか使わなかった。

「神智学協会」のスイス本部はジュネーブにある。一九〇〇年からはじまった懇談と講演という形での定期的活動は、実際的な関心を集めていったが、その証言をわれわれは地方新聞の中に見出すことができる。しかしジュネーブにあったいくつかの秘密集会所はフランス支部に直結されており、アニー・ブザン（一八四七年―一九三三年）の路線に繋っていた。

一方、ドイツ語を使用するメンバーの大部分はルドルフ・シュタイナー（一八六一年―一九二五年）の影響下にあった。一九一〇年十二月のスイス支部の正式設立はこれら二つの志向性を持ったグループ同士の対抗意識という文脈において解されなければならない。スイス支部の創立を認証した証書にはジュネーブの六十一名のメンバーが同意し、一方、シュタイナー派の百三十二名の会員はドイツ支部の傘下に入った。[7] その後間もなくして一九一三年にルドルフ・シュタイナー派が「人智学協会」を設立したため決定的な分裂が訪れた。

「人智学協会」の競合は、確かに、スイスにおける「神智学協会」の規模が小さいままであるということの大きな原因であろう。更に「神智学協会」は、初めは急速に発展したが（一九一七年には三百六十四名となった）、国際的な規模をもつ「神智学協会」の内部の混乱や局部的な紛争によって初期の努力もくじかれてしまった。それでもなお、ジュネーブのような都市では「神智学協会」は二十世紀初頭から間断なく活動し続けてきており、様々な側面から見て、東洋的な思想固有の諸テーマを普及させた実績は否めない。

厳密に言って、少なくともスイスが神智学から東洋の宗教運動の入植へと移行する過程にあるということは言

えるだろう。例えば「神智学協会」のメンバーであったハンナ・ヘルマンはスワミ・シヴァナンダ（一八八七年―一九六三年）の弟子となり、一九五四年に「欧州神性生活学会」が創設されるとその会長を引き受け、次いでシヴァナンダの死後はその弟子の一人であるスワミ・オムカラナンダ（一九二九年生まれ）のいるスイスにやって来た。スワミ・オムカラナンダは、ウィンタートゥールに居住し一九六六年、その地に「神性栄光本部」を設立した。これは苦しい歴史を経てきたが、今ではヒンズー教の隠遁者の庵としてはスイスで最も古いものとなっている。

しかし「神智学協会」だけが東洋思想の専売特許をもっていたわけではない。一九一〇年頃、初めはスイス人の小さな集団であったが、ローザンヌにニヤナティロカがしばらく生活していた仏教徒の庵があった。彼は俗名をアルフォンス・ゲーテ（一八七八年―一九五七年）といい、ドイツ人としては初めての仏教僧であった。

ニヤナティロカは、ローザンヌのこの小さな仏教者の拠点で、欧州の地では初めての仏教修行者の聖職任命式を厳かに執り行った。一九一一年にニヤナティロカがスリランカに向けて旅立ってしまうと、ローザンヌの仏教徒たちの小さな中心地の存在は、一つの集団あるいは永続的な団体に発展していく道を塞がれてしまったかに見えた。チューリッヒに仏教徒の（上座部仏教を指向する）団体が設立されたのはようやく一九四二年のことである。

「神智学協会」や、仏教の散発的な出現の他に、両大戦間には、スフィ運動やバハイエ信仰、マツダツナンなどのようないくつかの集団の活動が見られた。スフィ運動の創設者イナヤット・カーン（一八八二年―一九二七年）は、一九二〇年に初めてジュネーブを訪れスフィ運動の正式の本部をこの町に置いた。

また、スイスの他の諸都市でも講演を行い聴衆を得ていた。しかし、カーンは「ジュネーブの協会は、容易に、しかも短時間でつくられたが、それを維持するのは常に困難であった。というのも会員の大部分が外国人であり、ジュネーブのメンバーも幾人かいたが、彼らは入会させるのが難儀で、しかも、簡単に去って行ったからである」[8]と述べている。

ジュネーブにおけるバハイエ信仰の歴史を研究している歴史学者も同様の感想を述べている。バハイエ信仰は一九二五年からジュネーブに国際事務局を置き、数多くの接触を展開していったが、活動は全面的に外国人信徒が執り行なっていた。

というのも当時、ジュネーブの信徒は一人もいなかったようである。両大戦間には幾人かのスイス人の信徒がいたようである。例えば科学者として名高いオーギュスト・フォレル[9]（一八四八年―一九三一年）がいた。しかしながらいずれにしても非常に小規模のもので、戦後スイスのバハイエ信徒数はわずか十二名を数えるだけであった。

他方、一九一一年にスイスに流入してきたマツダツナン運動は、会員数ももっと多く、スイス人信奉者の集団であった。「神智学協会」と同様に（表2参照）、現在のスイスでは、会員実数が減少傾向にあり、その平均年齢がやや高い宗教運動であるという点が重要である。

我々の知るところでは、マツダツナン運動は歴史学者やマージナルな宗教団体の専門家の関心の的にはほとんどなっていず、残念に思っている。実際には、この団体はなかなか興味深いものがある。というのもマツダツナンの信仰実践は肉体と精神の発展との関係性に重きを置き、様々な肉体的訓練と呼吸法を重視している。

こうした一面で、この宗派の運動がヨガの流行の先駆であったというのは是認できるように思われる。ヨガの各流派がスイスに初めて門を開いたのは、一九五〇年頃であった。しかしこの種の技術に対する関心は既に存在していたのである。それを示すものとして、一九三三年、モンテ・ヴェリタの丘のふもとに「東洋と西洋のヨガと瞑想」というテーマを掲げた有名な「出会いの場」（Rencontres Eranos）の最初の団体が設立されている。

しかしながら、ここでは極めて限定して、組織や運動の影響力だけに焦点をあてて展望してみよう。書籍を介しての影響がより大きなものであったことは確かである。これは初めは、外部の者に東洋への個人的な関心を覚醒させるものであった。

スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語と三つの異なった言語の影響を受けているが、ここではフランス語圏の地域に限ってみよう。ジャン・エルベールの意見では、フランス語圏で「インドに対する西洋人の関心を宣揚した初期の」人物として二人挙げている。密教徒のルネ・ゲノン（一八八六年―一九五一年）と作家のロマン・ローラン[10]（一八六六年―一九四四年）である。その趣旨は異なっても、東洋に精神的に拠ろうとする思想が両者に明確に表明されている。ロマン・ローランは一九二二年からスイスに在住し、ラマクリシュナやヴィヴェカーナンダの生き方や教えを流布していった。

しかし、ジャン・エルベール（一八九七年―一九八〇年）自身も多くの業績を残した。彼は東洋の思想家の膨大な著作をフランス語圏の大衆にわかりやすく解説した。レベルの高い国際的な解釈者であるこのフランス人はジュネーブに居住していたが、これと並行して一九三三年にインドの旅から戻って東洋学を始めた。「彼はロマン・ローランの妹の助けを借りてヴィヴェカーナンダの書物の翻訳作業にも携わった[11]」。

ジャン・エルベールのアプローチの特徴として、ヒンズー教の古典的な聖典は出版せず、現代のヒンズー教の指導者の書物を好んだ。というのも、これらの指導者たちの教えは完全に正統なままでありながら、簡潔な文体で西洋の読者によりわかり易いからである[12]。

彼の力添えでフランス語に翻訳されて出版されたものとしては、ヴィヴェカーナンダやアウロビンドなどの書物や、鈴木の有名な著書『禅仏教についての随想』などがある。これらの翻訳書は当初出版社に利益をもたらしていなかったが、諸々の世代の求道者の瞑想を助けるものであった。

一九五〇年代には、スワミ・シヴァナンダ派（神性生活学会）やパラマハンサ・ヨガナンダ派（自己完成学会）などの活動の中心がスイスに見られるようになった。

これらの団体が、何年も前から既にスイスで人々を引きつけていたその他の東洋の宗教（ラダ・ソアミ、メヘル・ババなど）に加わった。これらは一九六〇年代に始まる

宗教運動の急速な多様化の前奏曲であったが、紙面がないのでここでは詳述しない。さらに、スイスが他の欧州諸国で同じ時期に認められた発展と較べて極端に異なったイメージを与えているとは思われない。

「異教的環境」の役割

それ故、米国におけると同様に、またおそらく他のいたるところでもそうであるように、スイス国内への東洋の宗教運動の流入は、既に準備された土壌に生みだされたのである。

これにいくつかの補足的な観察結果を含めると、コリン・キャンベルがその論文の中で異教的環境と名づけたものが、こうした過程において果たす具体的な役割について結論できるように思うのである。彼が述べているように、「個々の異教を持続させる方向に導くようなものでないとしても、異教一般を生じさせる方向に明らかに向かっている環境において、異教は存在するにちがいない[13]。」

今世紀の前半六十年間のスイスの異教的環境の影響力の足跡を明らかにするために、例えば一九三八年からローザンヌで発行されている占星術の月刊誌『運命』のようないくつかの定期刊行物の内容をより念入りに吟味してみた。予期できるように、そこでは占星術と推測に基づく科学だけが問題になっていたのではない。

そこには時折、世界宗教の理想についてやヨガに関する暗示的な記事や、バガヴァド・ジタやバルド・テドルへの言及なども見られる。あるいはまた、まるで詐欺師のように数か月後に告発記事が載る前には、一九四七年には、その年大いに話題になった一人の奇妙な人物のメッセージが『運命』のコラムに掲載された。

この人物は「パアル・オマール・ミスライム・リンド」と称し、マハ・チョハンと名乗ったり、アガルタの摂政と称したりもした。この「マハ・チョハン」はスイスに多くの信奉者を持ち、一九四七年にローザンヌで行なった一連の講演では数多くの聴衆を集め、東洋的な宗教性に特徴的な主題に関するあらゆる質問を提起するよう望んでいることが、途中で気づかれるであろう。

「新時代の始まり」であるという確信のもとに一九五一年からシヴァナンダ派がジュネーブで刊行している定期刊行物『世界統合』(Synthèse Universelle)の内容はさらに有益である。

誌面には、神智学者やスフィの記事がラマクリシュナ派やヨガナンダ派の記事と並べられ、また日本の新しい宗教から全世界に向けてのメッセージも並載されている。各号には東洋と西洋の様々な宗教団体の紹介と所在地が掲載されているので、『世界統合』の購読者が興味をひかれた宗教団体に連絡をとるのも簡単である。

以上はほんの一例に過ぎない。この他に菜食主義や類似医学などのような分野についてはわれわれはまだ検証していない。

こうした歴史的アプローチからは、多様な伝達経路があることが明らかにされた。そしてこの経路から、西洋人以外の移植も植民地的過去ももたない、欧州の一つの国に東洋の宗教が流入してきたのである。

現状では数字的な調査結果が小さいままであるとしても、これは非常に短期間の情報であるし、また東洋思想に接触した人の数は、東洋の宗教団体の会員数よりはるかに多いことが認められるのである。

少なくとも近い将来に、新興宗教への改宗者が急速に増加するということはないであろう。逆に、この先十年の間に、多かれ少なかれ東洋的な、また東洋に影響されたメッセージから直接的に借りられた情報によって、自身の世界観を構築していく西洋人が増加するであろうことは大いにありうることである。長期的には、こうした宗教運動の発展による文化的、精神的な影響ははかりしれないであろうし、この現象に向けられた関心の深さを証明するものである。

〔表1〕スイスに流入したいくつかの東洋の宗教運動に関する統計と年代データ

宗教団体の名称	スイスに流入した年	会員数
*アーマディーヤ	一九四六年	約百五十名
*アナンダ・マルガ	一九七二年	活動家二十名
*クリシュナ信仰協会	一九七〇年	常勤活動家八十名
*ブラーマ・クマリス	一九八〇年	活動家十四名
*神性栄光本部	一九六六年	常勤活動家四十五名
(スワミ・オムカラナンダ)		
*バハイエ信仰	一九二三年(最初のグループ)	千二十二名
*ハイダクハン・サマジ	一九八三―八四年(正式設立)	五十～百名
	一九七七―七八年(国内信徒)	
*超越的瞑想会	一九六八年(第一本部開設)	
*ラマクリシュナ伝道会	一九五八年(恒常的活動開始)	一万二千名(?)
*ムーンニスト(統一教会派)	一九七二年	約百名(?)
	(一九六八年には設立失敗)	二百十名
*日蓮正宗	一九六七年(定期的会合開始)	常勤活動家三十名
*ラダ・ソアミ(ビーズ)	一九三八年	約二百名
*サハジャ派ヨガ	一九八二年	約百五十名
*精神性学会	一九七六年	約百名
(サワン・キルパル・ルハニ)		四十二名
*シュリ・ラン・チャンドラ伝道会	一九七三年	
*シッダ派ヨガ	一九七四年(定期的会合開始)	約四十名
*スリ・チンモイ本部	一九七二年	約四百五十名
*サバッド	一九五九年頃	百名
*真光教	一九七四年	約百名
*神智学協会		入会者七百七十名
	一九一〇年(スイス支部設立)	活動家約二百五十名
		約百三十名

〔表1の註記〕スイスに流入した年は、その団体のスイス支部が設立された年、または定期的に局地的活動が始められた年としている。何件かの例では、その年以前から既に散発的に、あるいは地域の組織が構築されないままで活動が行われていたものもある。

会員数については、所属の基準が団体によって異なっている。中には会員にいくつかの等級をつけている団体もある。「神性栄光本部」や「クリシュナ信仰教会」には常勤の活動家の他に、正確には数えられない数多くのシンパがいると主張している。また、いくつかの団体では正式な入会手続を持っていないので、「会員」という概念があてはまらないようである。例えばシッダ派ヨガの場合には、スイスの団体本部に多かれ少なかれ定期的に連絡を取っている者の概の数を会員数としている。

最後に、これらの統計データは一九八七年―一九八八年に収集されたものであることをお断わりしておく。

〔表2〕スイスにおけるいくつかの東洋の新興宗教団体の年齢別会員状況

宗教団体	20歳未満	20-30歳	30-40歳	40-50歳	50-60歳	60歳以上
アナンダ・マルガ	10%	50%	40%	—	—	—
クリシュナ信仰	10%	70%	15%	3%	2%	—
神性栄光本部	15%	15%	20%	15%	20%	20%
バハイエ信仰	25%	13%	25%	14%	9%	14%
精神性学会	5%	20%	30%	12%	12%	21%
シュリ・ラン・チャンドラ伝道会	5%	25%	32.5%	25%	7.5%	5%
真光教	6%	26%	34%	21%	10%	3%
神智学協会	—	1%	5%	10%	20%	64%

（これらのパーセンテージは一九八七年―一九八八年に各宗教団体から通達されたものである。概数で示してあるがほぼ現状と一致していると思われる）

註

（1）J・F・メイヤー著『西洋世界における新しい宗教性の出現』、アランR・ブロックウェイ／J・ポール・ラジャシェカー監修『新興宗教運動とキリスト教会』（ジュネーブ、WCC出版社刊、一九八七年、pp. 60-68参照）。

（2）スイスで行なわれた調査で東洋宗教の指導者によって喚起された潜在的な関心をより現実的に見極めるために、ゲルハルト・シュミットシェンが西ドイツで行なった最近の調査を挙げておく。『宗派と精神修養―西ドイツの新興宗教の活動と勢力範囲』（ブレイスゴー、フライブルク、ヘルデル、一九八七年）。

（3）比較資料
ネオ・アポストリック教会の信者数……約四万名
エホバの証人の活動家……一万四千名以上
モルモン教徒……約六千名
キリスト再来派……五千名

（4）ロドニー・スターク／ウィリアム・シムズ・ベーンブリッジ共著『宗教の未来―還俗、信仰復興、宗教組織』（バークレイ、カリフォルニア大学出版、一九八五年、p. 499）。

（5）フリッツ・ブランケ著『教会の統一と宗派』の中の「欧州におけるアジア宗教の潮流」（ゾリコン、福音出版、一九五七年、pp. 95-128 (p. 95)）。

（6）"Monte Verita（モンテ・ヴェリタ）-Berg der Wahrheit（実在の山）Lokale Anthropologie als Beitrag zur Wiederentdeckung einer neuzeitlichen sakralen Topographie"（ミラノ、エレクタ出版、一九七八年）。

（7）ユージェン・レヴィー著『アニー・ブザン夫人と神智学協会の危機』（パリ、一九一三年、pp. 36-41）。

（8）『ビール・オ・ムルシッド・イナヤット・カーンの伝記』ロンドン／ハーグ（イースト・ウエスト出版、一九七九年、p. 154）。

（9）ジョン・ポール・ヴェダー著『人類の幸福のために―オーギュスト・フォレルとバハイエ信仰』（オックスフォード、ジョージ・ロナルド、一九八四年）。
エピソードとして、現在の千スイスフラン紙幣にこのオーギュスト・フォレルの肖像が使われていることも記しておく。スイス国立銀行は果たしてこのような名誉な扱いを受けている人物が実は東洋の新興宗教に改宗したということを知っているのだろうか。

（10）ジャン・ビエス著『一九五〇年代初頭のフランス文学とインド思想』（パリ、クリンクシーク社、一九七四年、p. 349）。

（11）アンドレ・シャモ著『ジャン・エルベール、平和の使者』（一九六五年六月十六日完成）。

（12）『読者の手引き―インド宗教に関する基礎的な書誌』（一九四二年、P. 3）。

(13) コリン・キャンベル著『宗教、宗教的環境、還俗』(マイケル・ヒル監修)。『英国の宗教社会年鑑—5』(ロンドン、SCM出版、一九七二年、pp. 119-136 (p. 121-122))。

(スイス国営学術研究基金研究員・新興宗教研究センター学術委員会事務局長)
訳・高橋寿美江

〔追記〕本論文は「スイス国営学術研究基金」の「二十一世紀の研究のための国家計画」(『文化の多元化と国家のアイデンティティ』)の一環として執筆されたものである。同機関のご支援に深謝している。